

ゲーテの革命劇をめぐって

國松, 孝二

<https://doi.org/10.15017/2332960>

出版情報 : 文學研究. 39, pp.1-21, 1950-03-31. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



ゲーテの革命劇をめぐつて

國 松 孝 二一

戯曲作家としてのゲーテの経歴は、十八歳のときにかきました『戀する者の氣まぐれ』にはじまり、五十四歳のときに完成しました『庶出の娘』にをはります。もつとも、『ファウスト』をドラマにかぞへられますと、ゲーテの戯曲作家としての経歴は、ゲーテの亡くなつた年にをはるわけになりますが、『ファウスト』は嚴密な意味における戯曲作家としてのゲーテの業績からとりのぞいてさしつかへないと思ひます。さうしますと、戯曲作家としてのゲーテの生涯はおほよそ三十六年になります。この三十六年のあひだに、いつたいゲーテはどれくらゐの數のドラマをかいたかと申しますと、ゲーテのことだからさだめし多いだらうと考へられるかもしれませんが、案外に少いのであります。めぼしいドラマとしては、約十篇ほど書いてゐるにすぎません。もちろん、小さなドラマの斷片、さらに祝祭劇とか謝肉祭劇とか歌劇とか假装行列劇とかいふやうなものまでも計算にいれますれば、かなりの數にのぼることになりますけれど、主要なものはいたい十篇ぐらゐといつてよいと思ひます。そしてこれらのドラマは、その成立の時期によりまして四つの部類に分けることができます。第一は『戀する者の氣まぐれ』によつて代表されるロココ劇であります。第二は『ゲッツ』のうちに頂点を見出したシュトゥルム・ウント・ドラングの劇であります。第三は『イ

『ファイデーニエ』によつて完成された古典劇であります。第四は『庶出の娘』のうちに集大成された、といふより、集大成されようとした革命劇、つまりフランス革命を題材としてあつた劇であります。

さて、かう分けてみまして、一つ異様に思はれることがあります。それは、戯曲作家としてのゲーテは、ロココからシュトゥルム・ウント・ドラングへ、シュトゥルム・ウント・ドラングからさらに古典主義へとすすむにつれて、内容的にも技巧的にも次第に上昇してゐるのにもかかはらず、革命劇にいたりますと、いままでの上昇のカーヴが急に下降してゐることあります。ゲーテの革命劇としては、『庶出の娘』の外に『グロースコフタ』とか『市民將軍』とか『激昂せる人々』とかいふやうなものがありますけれども、『庶出の娘』はともかくとして、その他の作品には道化芝居や茶番劇乃至仁輪加劇にもちかいやうなものがあつて、ドラマとして出来栄のかんばしくない、かなり價値の低いものであります。『ファイデーニエ』や『タッソー』をかけたゲーテが、どうしてかういふやうな拙い、おさなりの、かるいドラマをかけたか。それも、ゲーテ自身にとつても實に重大な事件であつたフランス革命を題材としながら、どうしてさういふやうな、題材の大きさと重みとにまつたく不釣合ひな、小さなかるいドラマをいくつも書いたか、書かざるをえなかつたか。これが第一に不思議点であります。

それから、第二に奇妙に思はれる点は、『庶出の娘』以後において、ゲーテがドラマらしいドラマをぜんぜん書いてゐないといふことあります。『庶出の娘』をかきあげましたのは、はじめに申しましたやうにゲーテが五十四歳のときでありますから、その後ゲーテは約三十年間も生きつづけてをつたわけであります。そしてそのあひだに『親和力』、『西東詩集』、『イタリアの旅』、『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』、『詩と眞實』、『ファウスト』などの

主要な著作がぞくぞくとかかれてをります。しかも、ドラマらしいドラマは一つとして執筆されてをりません。これは妙なことであります。もつとも、ゲーテはドラマにもはや興味を失つてしまつたのであるといへばそれまでありますが、しかし、それにしても、なにゆゑ興味を失つたのであらうかといふことが、依然として一つの異様な、いぶかしい疑問として残るのであります。

以上二つの疑問、すなはち、戯曲作家としてのゲーテの業績が、第一になにゆゑ革命劇にいたつて急に低落したのであらうか、第二になにゆゑ革命劇以後において途絶えてしまつたのであらうか、これら二つの疑問につきまして、一つのつたない解釋の試みをしてみようとするのが、わたくしのけふの話のテーマであります。もつとも、これはわたくしの話をしきりまで聴いてくださるとわかることでありますが、二つの疑問は一見それぞれ獨立した別々の問題のやうに見えますけれども、實は内面的には密接な關係をもつてをりまして、一つの問題とみなしてさしつかへないのであります。第一の疑問にこたへることによりまして、わたくしたちは同時に第二の疑問にもこたへることができると思ひます。それで、さしあたり當面の課題としては、第一の疑問だけをとりあげまして、これに解決のころみを與へてみることにいたしませう。このころみのためには、先づ、フランス革命といふものが、ゲーテの作家的人間的發展過程のどのやうな時期におこつたかといふことと、フランス革命がゲーテにとつてどのやうな意味をもつたかといふことを、あらかじめ申しのべておく必要があります。

フランス革命は御承知のやうに一九八九年におこつてをります。一七八九年といひますと、ゲーテの四十歳のときでありまして、ゲーテがワイマル入りをしてから既に十四年たつてをります。すなはち、ゲーテがいゆる前期古典

主義時代をへて、すでに完成期古典主義時代にはいつてからのことになります。ゲーテの古典主義の代表的ドラマである『イフィゲーニエ』もすでに完成し、ゲーテを古典主義者として仕上げたイタリア旅行もうをばつてをります。ですから、當時のゲーテが文學者として又人間として、どういふ立場にたち、どういふ生活態度をとつてゐたかといふことは、ことさらお話しするまでもないやうなものであります。もつとも、傳統的な文學史的常識があつさり割りきつてゐるほどには、當時のゲーテの心理の動きは簡單でなかつたことはたしかであります。けれども、それはそれとして、まづ、當時のゲーテの特色をひとことで申しますと、いつても、完成期古典主義時代のゲーテの文學上生活上の特徴をひとくちでいひあらはすのはなかなか困難でありますし、いひあらはすにしても人によつてさまざまの言葉でいへると思ふのですが、わたくしはそれは秩序の精神であるといつたらよいのではないかと思ひます。

若いころのゲーテは、いふところのシュトゥルム・ウント・ドラング時代のゲーテは、秩序をさげすみ、むしろすすんで秩序を破壊することをもつてころよしとしました。一切の人爲人工をいみきらひ、既成の組織にはげしく反抗し、不羈奔放な感情の權利を主張しました。社會にぶちあたり社會の秩序をつきやぶつてまで、己れの自我をおもひきり擴大し放散させようとする、ひたむきな情熱にもえてをりました。ゲーテ自身の言葉をつかひますと、*„Diastole“* すなはち『放我』の力にみなぎつてをりました。つまり、若いころのゲーテは、よくいはれますやうに、いはば北方的なファウスト人でありまして、秩序ある市民的生活の埒をまもつて安穩にくらすことをいやしみに、北方的デーモンともいふべき天才的な巨人的な情熱の持主でありました。かういふ情熱はドラマー・ティッシンなものでありまして、それが『ゲッツ』のやうなドラマとなつて文學的に發現したことは當然のことです。『若きウ

『エーテルの惱み』も、はじめはドラマとして計畫されたものでありました。けつきよくは、小説として完成されたものの、それは小説のなかではもつともドラマにちかい書翰体の小説となりました。

ところが、古典主義の時期にはひりますと、ゲーテは、永久にうごいてやまず無限に自己を擴大しようとする北方的な Diastole の傾向を限定し、巨人的なドラマーティッシュな情熱を鎮壓しました。そして、秩序をそなへた堅固な着實な市民的生活を強化し、地に根をおろした平和な市民的家庭を建設し、文學的にも生活的にも、秩序をたつとぶエーピッシユな態度、“Diastole”に對する“Systole”の態度、すなはち『集我』の態度をとるやうになりました。簡単に申しますと、エーピッシユな秩序の精神が、完成期古典主義時代のゲーテの特色であるといつてよいと思ひます。しかし、さうはいつても、この時期のゲーテがエーピッシユな秩序の精神だけになりきつてしまつたといふのではありません。後年ゲーテは、永いあひだ行方知れずになつてをりました青年時代のドラマの斷片『プロメーテイス』が見出されたとき、この巨人的なドラマーティッシュな情熱と力とに充ちあふれた作品をよみかへして、『われわれはことごとく火山の上に眠つてゐるのだ』とかきつけましたが、そのやうに、エーピッシユな秩序の精神によつて靜かにささへられてゐた古典期ゲーテの文學と生活の底には、依然として、北方的ファウスト人のドラマーティッシュな情熱が、噴出口をもとめて燃えつづけてゐたのであります。その後ゲーテがミンナ・ヘルツリープに戀し、マリアンネ・ウイレメルに戀し、七十三歳にいたつてもなほウルリーケ・フォン・レヴェツツォーに戀して正式に結婚を申しこんだといふことは、このことを裏書きするものであります。古典期ゲーテのエーピッシユな秩序の精神をもつともよく表現してゐる敘事詩『ヘルマンとドロテア』さへもが、はじめはドラマとして計畫されたといふこと

も、このことと關係のないことではありません。ゲーテ自身、八十歳の老齡になつてもなほ、「もしわたしが自分といふものを放任しておいたら、おそらくわたしはわたし自身をもわたしの周囲をも破壊させてしまふだらう」と、いつてをります。とかくわたくしたちは一般にゲーテを、オリウムボスの峰の上に居をかまへて悠々と下界をへいげいしてゐる神のやうに考へがちでありますが、それは單なる教科書的なゲーテ像でありまして、それほど誤つたゲーテ像はないのであります。ゲーテはむしろ一生のあひだ、自己を巻きこみ拉しさらうとする危険な情熱に怯えなやみつづけた人でありました。ですから、ゲーテの古典主義といふものは、實ははげしい巨人的な情熱を底にたたへながらそれを力づよく抑壓して、その上にうちたてられたエーピッシュな秩序の世界であります。この世界は従つて、つねに大きな危険をはらんでゐたわけであります。うつかりすると、いつ情熱が爆發して、秩序の世界が瓦解するかも知れなかつたのであります。しかも、いまだこの世界が建設されてから日があさく、強固にかたまつてゐなかつたとき、従つてそれだけ危険が大きかつたとき、そのときにフランス革命がおこつたのであります。

フランス革命は申すまでもなく、自由、平等、博愛を目標にした政治的、社會的な革命であります。わたくしたちの住んでゐる世界を、封建的な世界から近代の民主的な世界へ轉換させた大きな運動であります。ゲーテにとつてもまたフランス革命は、このやうな革命でありこのやうな運動でありまして、又さういふものとしてまづゲーテの興味をひき共鳴をよび賛成をえたのであります。しかし——わたくしは恐らくそれだけではなかつたらうと思ひます。フランス革命といふものは、社會的、經濟的、政治的な観点からはなれて、心理學的にこれをみれば、一つの巨大なる、もつともドラマーティッシュな人間情熱の爆發であります。そして事實、そのやうな情熱のすさまじい噴出とし

て、フランス革命はゲーテを襲つたに相違ありません。ゲーテがおのれの古典的世界の下に、エーピッシェな秩序の世界の下に抑へつけてゐた、北方のドラマー・ティッシェな情熱は、革命の情熱の鳴動と爆音とに呼應してゆれだしました。自由、平等、博愛といふ革命の内容がゲーテの賛成するところのものであつただけに、そして又ゲーテの樹立した古典的世界の重みがいまだそれほど強大でなかつただけに、情熱の共鳴と振動とはいよいよその振幅を大きくしてきました。ここに、ゲーテの古典的なエーピッシェの世界のなかに、異分子ともいふべきドラマのはひりこんでくる所以があるわけであります。

もともとゲーテの古典主義の世界は、エーピッシェの世界でありまして、ドラマの世界ではありません。ちやうど、クライストの世界がドラマの世界であつて、エーピッシェの世界ではないのと正反對に。ドラマ『イフィゲーニエ』は、ゲーテのこの古典的世界の境界にたてられた境界石ともいふべきものでありまして、『ゲッツ』などとくらべるとかなりドラマらしくないドラマ、叙事詩にほぼ接近を示してゐるドラマ、エーピッシェなドラマであります。ゲーテは『イフィゲーニエ』以後においては、もはやドラマをかくべきではなかつたのであります。『イフィゲーニエ』が最後の頂点であり、うつくしきエピソードであるべきであつたのであります。ところが、革命の情熱にはげしく共鳴してゆれだしたゲーテの根づよいドラマー・ティッシェな情熱は、初秋の野に櫻の花が狂ひ咲くやうに、ゲーテのエーピッシェな古典的世界のなかに、突如ドラマの花を咲かせてしまつたのであります。

しかし、もしもゲーテがおのれの樂きあげた古典的世界をわれから突きくづして、この情熱に身をまかせたとしたならば、あるひは、この狂ひ咲きのドラマの花も、大きなみごとな實をむすんだかも知れません。けれども、ゲーテ

としては、自分が苦心經營して樹立した古典的エーピックの世界を犠牲にすることは、もちろん堪へえないところでありました。むしろゲーテは自分自身の情熱と革命の情熱とに積極的に對決して、それらを共に處理し克服しようとはせりました。そして、みづからの秩序の世界を安全にし強化しようとなつて努力しました。ゲーテはフランス革命をひややかに傍觀してゐたなどといふ人もありますが、さうした説はまつたく根據のないことであります。もしかりにゲーテがフランス革命を對岸の火事のやうに冷然として見すごしてゐたとすれば、フランス革命を題材にしてゲーテがいくつかのドラマや小説をかいいたといふ事實、また後年エッケルマンの對話や『年代記』その他において、ほとんど執拗にといつてもよいほど幾度となくフランス革命について言及したといふ事實、これらの事實ははたしてどのやうにして説明しえられるのでありませうか。と申しますのも、ゲーテのやうな偉大な作家が、といふ意味は、ゲーテのやうに文學と生活とが、あるひは文學と人間とが比類なく完璧に密着した作家が、おのれの冷淡にながめすごしたものを、そのやうにおのれの話題としてとりあげ又おのれの作品として造型するといふやうなことは、まつたく考へられないからであります。事實、ゲーテはほとんど十五年の永いあひだにわたつてフランス革命といふものと對決しつづけまして、自分自身の解決の道を見出し、自分自身の納得する仕方、これを處理しようと苦心したのであります。そして、それによつて同時に、自己の胸底に依然として不氣味に渦をまいてゐる巨人的な情熱の噴出を防止し制壓して、おのれのエーピックな秩序の世界を確立しようとなつてたのであります。といふのも、くりかへして申し上げますれば、ゲーテにとつて、フランス革命と對決することは、同時に革命の情熱と對決することであり、また衰へること知らぬ己れの強大なる情熱と對決することであつたからであります。

いまゲーテのさうした辛苦の徑路を、ゲーテのかきのこした革命劇そのものを材料にして觀てみることにいたします。ゲーテがフランス革命と對決した結果の最初の報告書は『グロースコフタ』であります。この喜劇は一七九一年、つまりフランス革命がおこつてから二年後、ゲーテの四十二歳のときの作であります。カリオストロ伯をモデルとし、頸飾事件を筋としてをります。カリオストロ伯と申しますのは、當時ヨーロッパ全土に有名であつた大山師、大詐欺師であります。物情騒然たる當時のヨーロッパの混亂に乗じて、あやしげな呪法をもつて人心を籠絡して惡事をはたらき、巨利をむさぼり、虛名をはくしてゐた男であります。このカリオストロ伯が『グロースコフタ』の一人の人物のモデルとなつてをります。頸飾事件と申しますのは、フランス革命直前におこりました、ルイ十六世の王妃マリ・アントアネットにからまる、これまたその當時有名な事件であります。どんな事件かといひますと、シュトラースブルクの大僧正でありましたロアンといふ身持のよくない樞機官、このロアンが自分に目をかけてくれてゐたマリ・アントアネットが自分をうとんするやうになつたために、その寵をとりもどさうとして、ラ・モット・ヴァロア伯夫人に斡旋をたのみます。この夫人の背後にはカリオストロ伯がゐて、夫人に惡智慧をつけたりそのかしたりして惡事をさせてゐるのであります。夫人はロアンにむかつて、マリ・アントアネットが百六十萬フランのダイヤモンドの頸飾を非常にほしがつてゐる。ルイ十六世に買つてくれるやうにたのんだが王が買つてくれないので、もし貴方がこれを買ひもとめて後に進呈してくれば、執りなしてやらうというて、頸飾を買はせておいてそれを自分が着服してしまひます。しかし、やがてこの詐欺行爲がばくろして、ロアンはバスチーユの牢獄にぶちこまれ、ラ・モット・ヴァロア伯夫人は答刑に處せられ、烙印を押された上で投獄されます。マリ・アントアネットは實際は事件に關

係がなかつたのでありますが、ロアンと情交をむすんで高價な頸飾を手にいれようとしたといふ風評をたてられて、がうがうたる非難をうけました。といふのがいはゆる頸飾事件でありまして、これがゲーテのドラマ『グロースコフタ』の素材であり筋であります。

この劇でゲーテはいつたいどういふことを言はうとしたかと申しますと、上流社會の腐敗と墮落、奢侈と偽善とをゑがかうとしたのであります。そしてそれによつて、革命がおこるべくしておこつたことを説かうとしたのであります。ゲーテは彼自身が『年代記』のなかで書きしるしてをりますやうに、頸飾事件を早くから重大視しまして、この事件を上流階級の頹廢のしるしであると考へ、そこから重大な結果が生ずることを恐れ、その幻のために長いあひだなやんでゐたのでしたが、その懸念がフランス革命となつて實現されたのであります。ゲーテは革命は民衆の罪でなく上層階級の責任であることを確信しました。上層階級がつねに注意してただしい道をふみおこなひ、民衆から強要されないうちに適宜改善をおこなつたならば、革命などはおこりうる筈はない。上流社會が不正をおこなつて反省しないために革命がおこるのだと考へました。この考へ、この確信がドラマ化されて『グロースコフタ』になつたわけであります。つまり、『グロースコフタ』においては、といふことは、フランス革命とゲーテが對質した最初の段階においては、革命と革命の情熱とが一應ゲーテによつて肯定され是認されてゐるわけであります。

ところが翌々年、すなはち一七九三年、ゲーテは彼がフランス革命と對決した第二の決算書としまして『市民將軍』といふ劇をかきました。主人公はシュナップスといつて、政治好きな村の理髮屋であります。同じ村にジャコベン黨にかぶれて、フランスのニュースを新聞でよみふけては感心してゐる、メルテンといふ農民がゐるのですが、この

メルテンのところに、シュナップスが捕虜となつたジャコベン黨員の制服と制帽とをもつてやつてきまして、これを見ろ、おれはジャコベン黨によつて市民將軍に任命され、これからこの村に革命をおこすのだとおどかしつけた上で、革命政府の綱領をのべたてて、實例でもつてそれを説明してやらうと、メルテンの家の戸棚から食物をとりだして勝手に飲んだり食つたりいたします。しかし間もなく、シュナップスのこの狡猾な計畫は露顯して、かれは捕縛されてしまふのであります。以上のかんたんな筋書でもおわかりになりますやうに、このドラマはジャコベン黨やジャコベン黨にかぶれたひとびとへの、おもひきつて露骨な皮肉であり嘲笑であります。口では一般市民の福祉のために、上流階級を打倒しその不正と横暴とをとりのぞくのだとりつばなことをいひながらも、實のところは私利私慾のためにすぎないといふことを、かなりあからさまに諷刺してゐるのであります。その意味で、ドラマ『市民將軍』においては、フランス革命と革命の情熱とが否定され否認されてゐるのであります。

第一作『グロースコフタ』において、上流階級乃至支配階級の腐敗や墮落をばくろし攻撃し、フランス革命を當然おこるべくしておこつた事件として、ふかい理解と同情とをよせたゲーテとしては、これはあまりにも甚だしい變りやうであるといへるであります。なぜこのやうに變つたかと申しますと、これは單なる無節操な豹變や變節といふべきものではないのでありまして、やはりゲーテの眞劍なくらしい體驗にもとづいた必然的な、のつびきならぬ變化でありました。やむにやまれぬメタモルフォーゼでありました。と申しますのは、ゲーテはこのあひだに、プロシヤとオースタリーとの同盟軍がくはだてましたフランス遠征に、ワイマル公とともに参加して、戦争の勞苦をつぶさになめると同時に、革命と戦亂とがもたらす悲惨な、非人間的な、破壊的な結果とを眼のあたりながめたのであります。

す。しかも一方においては、フランス國內において、とりわけパリにおいては、革命政府が次第に過激化し野蠻化して、壓制と暴力とをもつてあらゆる秩序と平和とを破壊し、殺戮につぐに殺戮をもつて貴い人間の血をながしつづけました。これはもはや、ほんたうに自由と平等とを念願とするひとびとが、一般民衆のために行動してゐる姿とは考へられません。むしろ、悖德のやからや無賴の徒がおのれ自身の利益のために、おのれ自身の支配慾のために、好き勝手なことをしてゐる、あさましい姿としか思はれませんでした。ゲーテとしてはもはや、革命がどんなに正當な理由によつておこつたにしても、このやうに極端に暴力化することは、たうてい認容することができなかつたのであります。しかもなほドイツ國內においては、かうした革命にいまなほ熱狂し、フランスへ走つて革命政府に身を投ずるひとびと、ドイツにも革命的な氣分をあふり立てようとするひとびとがゐたのであります。ゲーテはそれらのひとびとに對しても、かぎらない不快と憤りとを感じずにはゐられなかつたのであります。ゲーテは反動的にそのれの保守的な姿勢を強化しました。「わたしは、かく暴力づくで解放された状態の、殘酷にしてとどまるところを知らぬ結末をこの目で見たし、また同時に類似の秘密行動が國內にもあるのをよく見ぬいてゐたので、斷乎として既存のものに固執した。」と、ゲーテ自身後年になつて、當時の自分の變貌の姿をゑがいてをります。ワイマルの樂長をしてゐた人にライヒャルトといふ人がゐますが、この人はゲーテの抒情詩を作曲したりしまして、その才能をゲーテがかなり高く評價してゐたのですけれども、このライヒャルトが革命熱にとりつかれるのをみると、ゲーテはこれと絶交してしまひました。『市民將軍』の一種のボンチ繪、卑俗なカリカトゥールはかうしてかかれざるをえなかつたのであります。ゲーテは『年代記』のなかで、みづからその間の經緯を次のやうにのべてをります。「活動的な創造

的な精神をもち、また眞に愛國的な心情をいだいて祖國の文學を促進してゐる者が、あらゆる存在してゐるものがくつがへされながらも、そのことから何等のよりよきもの又はただの別のものでも生れてくるといふことを、ほんの漠然とさへも感ずることができないために、驚きの聲を發することがあつても、それをとがめだてする人はないであらう。同じ人が、同様な影響が祖國ドイツにおよんできて、狂氣じみた人間、否下等な人間が權勢を占めてゆくのを腹立たしく感ずるならば、それは世人の賛成するところとなるであらう。この意味で『市民將軍』はかかれたのである。」

ゲーテは革命と戰爭とに對して、そこにすさまじく荒れ狂ふドラマティックな情熱に對して、嫌氣がさしてきました。興味も希望もちえなくなりました。もつと靜謐な人間性ときびしい秩序とにささへられた世界へ、藝術と學問との世界へ、あこがれるやうになりました。再度ワイマル公にしたがつて獨佛國境に出征し、マインツ攻防戦にくははりながらも、ゲーテはしきりに藝術の女神に心をひかれ文學上の仕事にふけり、光學上の研究に従事しつづけました。やがて、革命軍の占領してゐましたマインツを同盟軍がおとしれまして、マンハイム、ハイデルベルク、フランクフルトを越えて、ワイマルにかへつてまゐりました。ゲーテはある友人にあてましてこんな手紙をかいてをります。「私の従軍生活とあらゆるひとびとの政治的氣分とは、私を家庭へ逐ひやります。愛と友情、藝術と學問以外にはなにものも侵入しえない垣を、自分のまはりに張りめぐらすことのできるあの家庭へ、私を逐ひやります。」また、こんな手紙をかいてをります。「他のひとたちがほとんどみな政治病になやんでゐるときに、藝術的なよろこびが私を多忙ならしめてゐます。」

けれども、ゲーテは自分ひとりだけの、狭いそして強固な垣根をめぐらした、藝術と學問との世界のなかに閉ぢこもり、そこにしづかに安住して、フランス革命に、時代の大きな動亂に、ぜんぜん背をむけてしまふことはできませんでした。ゲーテはそれほどウィンケルマンのいふ「しづかなる偉大さ」の把持者ではありません。それほど天才の利己主義の所有者でもありません。人權を主張し自由と萬民の平等をさげんで革命をおこしながら、その革命の投げおとした不幸な石の下にひしがれて、もたえ苦しんでゐるひとびとの姿は、ゲーテの心を落ちつかせませんでした。時代の變動と苦惱とをよそにして、藝術と學問との世界のなかに自分だけの安住の地を見出して、そこにゆるぎのない生活をいとなむといふことも、ある意味ではきはめてりつばな、そしてなかなか容易ではない、時代に對處する生き方ではありませうが、ゲーテはさうした對處の方法には安んずることができなかったものであります。しづまつたかに見えたゲーテの情熱は、ふたたびわきかへつて大きく渦をまきはじめました。ゲーテはおのれの垣をふみやぶつて、ふたたび直接フランス革命と革命の巨大なる情熱とに對決しました。それを通じて、おのれの北方的情熱のデームンと對決しました。そして、憤りや嫌惡、攻撃や忌避よりも、もつと積極的な建設的な解決の方法をもとめようと努力しました。かうした努力の末、ゲーテはフランス革命に對する彼の第三の決算書として、一七九三年から一七九四年にかけて、ドラマ『激昂せる人々』をかきました。

このドラマは未完成のものでありますが、主人公はブレメといつて、『市民將軍』の主人公シュナップスと同じやうに、やはり理髮屋であります。しかし、シュナップスのやうに火事場泥棒をする口先ばかりの似而非革命家ではありません。輕佻な人間ではありませんが、みづから革命思想を信じ、革命的な行爲を是としておこなふ人間でありま

す。このプレーメが農民を煽動しまして、領主に對して一揆をおこさせようとするのであります。これには正しい理由がないわけではありませんでした。といひますのは、現在の領主の祖父の時代に、農民たちは山林や牧場や田地をいくつも提供しまして、從來の賦役を免除されたのでありましたが、その祖父の死後はこの契約が實行されず、そのうへ契約書も行方不明になつてしまつて、訴訟をおこしても一向に埒があかなかつたのであります。いよいよ暴動がおこる前になつて、前代の領主の未亡人がバリからかへつてきます。未亡人はバリにおいて、國民が重い桎梏から解放されてはじめて自由になつた瞬間の大きなよろこびを見て、かへつてきたのであります。そして、民衆はどんなに押へつけられ虐げられようが、これを押しつぶしたり暴壓したりすることはできない、下層階級の革命や暴動は上層階級の不正の結果である、といふことをしみじみ感じまして、「これからは、世間においても屋敷内においても、わたくしは自分が正しくないと考へることは極力避けるつもりです。そして他人がそのやうなことをした場合にも、公然とわたくしの意見を發表するつもりです。どんな場合でも不正がおこなはれたら、わたくしは黙つてゐないつもりです。たとへ、そのために自分が民主主義者だと弾劾されても」と、さうはばかりすいふ人であります。このドラマは、既に申しましたやうに、未完成のものでありますので、これから先はゲーテの書きのこしたプランによつて推測するより仕方がありませんが、それによりますと、契約書がさがし出され、領主の屋敷におしかけてきた農民一揆の者にそれが示されて、両者が和解し、圓滿に事件が解決する、といふことになつてをります。

筋書にもならないやうな以上のスケッチでも、みなさんにおわかりと思ひますが、このドラマは農民の權利を擁護し、彼等の暴動の正當さを是認してゐるのであります。いひかへれば、フランス革命とゲーテが對決した最初の決算

書ともいふべき『グロースコフタ』におけるやうに、ゲーテはここにふたたび、フランス革命と革命的情熱の正しさを再確認したわけであります。第二の清算書たる『市民將軍』におけるやうに、もはやけつしてフランス革命をもつて、愚劣と邪惡、私利と權勢慾との激情的な發現であると見なさなくなつたのであります。「今日ここから世界史のあたらしい時期がはじまる。」これはゲーテが自分の語つた言葉として『滯佛陣中記』のなかにかきしるしてゐる言葉でありまして、よくひとの引用する有名な言葉でありますが、フランス革命に對して、いまやかうした態度、かうした見方がつよくなつてきたのであります。そして、この考へ方はゲーテの一生を通じてかはらなかつた考へであつたと、いつてよいだらうと思ひます。ゲーテは三十年後になつても、「わたしは横暴なる專制の味方ではなかつた。いかなる革命も大きな革命は國民の罪ではなく政府の罪だと、あくまでも確信してゐた」と、いつてをります。また「わたしは未來を期待させるやうな改良を非常によろこんでゐる」とも、いつてをります。

しかし『激昂せる人々』においては、ゲーテのフランス革命觀に、といふより一般にゲーテの革命觀に、ひとつの重要な要素が追加されてまゐりました。それはどういふことであるかと申しますに、革命を暴力をもつて遂行し貫徹しようとすることは、かへつて多大の不幸と災害とをもたらし、革命の本來の目的を實現することにはむしろならない。上に立つものの正しい政治と、下にあるものの理解と協力とによつて、秩序をまもりつつ徐々に段階をふんで社會は改革されてゆくべきものである。といふことであります。この考へがあらたに加はつてきたのであります。そしてこれがこのドラマの中心思想、いはばイデーであり、伯爵未亡人の考へであります。そして又これが、ゲーテがフランス革命と對決して最後にたどりついた最終決算であり、決定的究極的な結論であります。「わたしはこの氣持

はまつたく尊敬すべきだと思ふ。それはその當時のわたしの氣持であつたし、また現在のわたしの氣持でもある。」と、ゲーテは後年にいたつていつてをります。そして、同じやうな見解をいくどとなく述べてをります。エツケルマンに語つてゐるばらの花の比喩は、ゲーテのこの信念をきはめて美しく表現したものとして、わたくしの忘れがたいものであります。ゲーテは言つてゐます。「わたしはわがドイツの自然が供給しうるもつとも完全な花としてばらが好きだ、とはいつても、いまこの四月の末にもう、わがやの庭にそれを供給してくれと要求するほどわたしは馬鹿ではない。いまは萌え出したみどりの葉をみて満足してゐる。やがてその葉がつぎつぎと一週間ごとにだんだん長い莖をつくりなしてゆくを見れば、それでわたしは満足だ。五月になつて蕾が見らればうれしいし、六月になつてつひにばらの花そのものが思ひきりきれいに馥郁として咲きだしてくれたら仕合せだ。しかし、そのときまで待ちきれない者は、温室を利用するがよい。」ゲーテは室咲きのばらを、温室でばらを無理に不自然に咲かせることを、好まなかつたのであります。葉から莖へ、莖から蕾へ、蕾から花へと、一步一步規則ただしく成長しておのづから開花するのを、ゲーテは愛したのであります。

ゲーテは過激な變動、急激な變革、暴力的な革新を忌みきらひました。自分は『眞の自由主義者』であるといつて、ゲーテは次のやうに語つてをります。「眞の自由主義者は自分の使用しうる手段をもちゐて、できるかぎり多くの善事を成就しようとする。しかし彼は注意して、しばしば避けることのできない缺陷を、すぐに火と劍とをもつて根絶しようなどとはしない。賢明な前進によつて公けの缺点を徐々に除去するやうにし、暴力的な處置によつて、しばしば同時に、同じくらゐの分量の善事を一緒に台無しにしてしまふやうなことをないやうにする。所詮この世はつ

ねに不完全であるのだから、彼は時と事情とにめぐまれてより、善きことが達成しうるやうになるまでは、現在の善きことで満足する。」すべてのものは既存のものを改良しつつ漸進的に發展すべきものである。順序をふみ一段一段と秩序たたく改善されてゆくべきものである。これがゲートの到達した信念であります。自分は現状維持者ではない、現在をそのまま維持するといふことは多くの悪いものを溫存することになる、とみづから言つてゐますやうに、ゲートは改革なり刷新なりをけつして頭から毛ざらひしたわけではなく、むしろそれを必要なこととしてよろこび迎へたのですが、ただ改革が正しい順序をとびこえ、しづかな秩序を破壊するとき、それを嫌惡し排撃したのであります。

『マインツの攻圍』といふ自敘傳のなかで、ゲートは次のやうな逸話をつたへてをります。マインツが陷落しまして、籠城してゐた革命軍の守備兵たちが撤退するときのことでありました。フランス革命軍にくははつて同盟軍と戦つたドイツ人の守備兵のひとり、それは背の高いうつくしい青年であつたさうですが、この守備兵がゲートの宿營してゐた税關のまへに馬をとどめました。彼のかたはらには、同じやうにうつくしい男裝した彼の愛人がつれをつてをり、二人の背後には四頭立ての馬車が數台、荷物をのせてつづいてゐました。ところが、この青年は建築技師で、掠奪と放火の嫌疑をかけられてをりましたので、町のひとびとはその姿をみとめますと、「あいつを止めろ、あいつをなぐり殺せ！」とさけんで、いきなり二人に襲ひかかりまして、馬からひきずり下ろさうとしました。窓からこの様子をながめてゐましたゲートは、すぐさま通りにとびだして、「待て！」と大聲で一喝しました。そして、國王は守備兵が自由にひきあげてをることを許可したのだ、ひとつとらへるべき者があれば國王が軍隊の手でひとつとらへる、君た

ちの不幸や憎惡は君たちになんらの權利をも與へはしない、わたしはどのやうな暴行をもゆるさない、と説ききかせました。このゲーテの説得のために、きほひたつた群衆も手を下すことをやめ、二人はあぶなく命びろひをしました。この事件がありましてから、ある友人がゲーテにむかつて、見も知らぬ、しかも犯罪者かも知らないやうな人間を、自分自身の生命の危険ををかけてまで助けてやるのは合點がいけないといひますと、ゲーテは「どうもわたしの性分だ。わたしは無秩序を忍ぶより、むしろ不正ををかす方がいいのだ」と、答へたといふことであります。「無秩序よりもむしろ不正を」——これはゲーテの有名な言葉でありまして、秩序を破壊して正義をおこなふよりは、不正ををかけてもよいから秩序を保ちたいといふのが、この言葉の文字どほりの意味であります。つまり、秩序の尊重といふことを、ゲーテ的な秩序の精神を、少しひねつて強烈に表現してゐるわけであります。そしてこの秩序の精神こそ、ゲーテが長いあひだフランス革命と革命の情熱とに、同時にそれを通じておのれ自身の熾烈な北方的情熱に、必死になつて對決して、やうやく手にいれた最後の結論であり總決算でありました。そしてこの結論によつてゲーテは、フランス革命と革命の情熱を、みづからの古典的世界のユーピッシュな秩序のなかに組み入れて處理することができたのであります。そしてかうしてはじめて、革命の情熱に共鳴して噴出しようと沸きたつ、みづからのドラマティックな巨人的情熱を抑壓し、はげしくゆれはじめた己れの古典的秩序の世界の崩解をくひとめて安定させ、それをさらに強化することに成功したのであります。

以上わたくしは、ゲーテがフランス革命と對質してこれを處理した辛酸の過程を、ゲーテの革命劇そのものを題材

にしてお話しいたしましたが、この革命處理の仕事はゲーテにとつて、實に骨の折れる仕事であつたに相違ありません。恐らくゲーテとしてはめづらしく、かなり狼狽して、いかに處理するかにとまどつたのではないかと想像されます。と申しますのも、既にお話しいたしましたやうに、フランス革命は政治的、社會的變革であるとともに、強大なる人間情熱の爆發として、鎖につながれてゐたゲーテのプロメーテウスの情熱の火焰を、危険なほどはげしく掻きたてたからであります。そしてそれによつて、ゲーテの樂きあげようとしたピラミッド、古典的秩序のエーピッシュュな世界を、ゆりくづさうとしたからであります。ゲーテは狼狽しながらも、懸命になつて、フランス革命とドラマーテイッシュな革命的情熱とを處理しようと努力しました。そして結局においてはこれを處理しをへ、おのれの存在のピラミッドを確立することができたのでありますが、このやうに處理しようと必死になつてあがいたところに、處理しようとおせりいらだちながらドラマを書いたところに、ゲーテの革命劇の多くが、ドラマとして十分な成長をとげることができず、低度のイロニーや卑俗なカリカトゥールの域を脱しない單なる畸型兒的ドラマとしてとどまつた主要なる原因が、あるのであらうと信じます。

ただ『庶出の娘』だけは、わが身をけづるこの苦しい處理がすでに完了してしまつてから、『ヘルマンとドロテーア』や『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』がもう書かれてから、出來たものであるだけに、革命劇でありながらも畸型兒たることを免れました。しかし、それは確立されたエーピッシュュな秩序の世界のなかにおいて、一度燃えあがつた革命的情熱の餘燼によつて生れたものであつて、ドラマとエーピックとの混合物として、『イフィゲーニエ』と對をなすものであります。そして『イフィゲーニエ』が、古典的秩序の世界の建設といふ、多年にわたつてゲ

ゲーテが汗と血をもつてつづけた壯大なる建築工事の、地鎮祭であつたのに對して、『庶出の娘』はその棟上式であつたといつてよいでせう。ゲーテのエービツクの世界はここにその骨組みを完成したのであります。それは無論その後、もたくましい北方的情熱によつて、いくどとなく揺りうごかされることはありません。しかし、もはやその情熱はゲーテのエービツシユな秩序の世界をくつがへして、ドラマの世界をふたたび現出するほどの威力を持つてゐませんでした。といふより、その威力を封ぜられてしまつてをりました。ときにすさまじい勢ひをもつて熔岩を噴出させることがあつても、その熔岩はもはやドラマの形をとることができず、抒情詩のなかに流れこむだけでありました。『庶出の娘』以後において、『ズライカの巻』や『情熱の三部曲』は生れえても、一篇の本格的なドラマも生れえなかつた所以であります。

追記。本稿はさる機會におこなつた講演の草案である。